

自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の対処資源が将来志向コーピングに及ぼす影響

Effects of Coping Resources on Promoting Future Oriented Coping Found in Undergraduates with High Levels of Autistic Traits.

市川 哲* 井澤 信三** 岡村 章司**
 ICHIKAWA Satoshi ISAWA Shinzo OKAMURA Shoji

本研究の目的は、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の、能動的コーピングと予防的コーピングからなる将来志向コーピング促進に内的資源としての肯定的・否定的自動思考と、外的資源としての家族からならびに友人・知人からの知覚ソーシャルサポートがどのような影響を及ぼしているかを、自閉症スペクトラム傾向が低い大学生との比較を通して検討することであった。387名の大学生が調査に参加した。階層的重回帰分析の結果、自閉症スペクトラム傾向高群では、肯定的自動思考と家族からならびに友人・知人からの知覚ソーシャルサポートから、能動的コーピングならびに予防的コーピングに対していずれも有意な正の影響が見出された。しかし、自閉症スペクトラム傾向高群・低群ともに否定的自動思考は将来志向コーピングに対して有意な影響を及ぼさなかった。これらの結果から、自閉症スペクトラム傾向高群の将来志向コーピング促進には肯定的自動思考と家族からならびに友人・知人からの知覚ソーシャルサポートに着目する必要があることが明らかとなった。

キーワード：自閉症スペクトラム傾向、大学生、将来志向コーピング、自動思考、知覚ソーシャルサポート

問題と目的

自閉症スペクトラム (Autism Spectrum Disorder) は「コミュニケーションの障害」「社会性の障害」「想像力の障害」の三つ組の症状からなる。また、自閉症スペクトラムは広義の自閉症の概念であり、自閉症の症状を健常者と自閉性障害者との間に量的なスペクトラム (連続体) を仮定するものである (Wing, 1981)。自閉症スペクトラムとして医学的診断を受けた大学生は大学が把握しているだけで1674人おり、発達障害をもつ大学生の内の73.4%に及んでいる (日本学生支援機構, 2015)。さらに、大学には診断名を持たないものの、自閉症スペクトラム的な行動特徴を示す大学生が数多く在籍しており、そして、そのような大学生は大学生活において高い困り感を示し、支援ニーズが高いとされる (山本・高橋, 2009)。このような状況から、大学は自閉症スペクトラムと診断を持つ大学生だけでなく、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生に対する支援を行うことが急務になっていると指摘されている (須田・高橋・上村・森光, 2011)。自閉症スペクトラム傾向が高い大学生に関する過去の研究 (市川, 2014; 金井, 2010; 田中・中村, 2014; 田中・西田・木村, 2012) では、Autism-spectrum Quotient-Japanese version: AQ-J (若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004) が使用されてきた。AQ-Jは、自閉症スペクトラム仮説 (Wing, 1981) に基づき作成された、自閉症スペクトラムの診断基準に当てはまる青年 (大学生を含む)・成人だけでなく、当てはまらない青年 (大学生を含む)・成人の自閉症スペクトラム傾向も測定することができる自己記入式の質問紙である。また、本研究で大学生の「自閉症スペクトラム傾向」と表記され

ているものは、特別な表記がない場合、AQ-Jを用いて測定された得点を指すものとする。

自閉症スペクトラム傾向が高い大学生が大学生活で不適応状態に陥る原因として、大学生活においてネガティブな環境刺激としてのストレスに数多く遭遇していることが理由として考えられる。このようなストレスに対して自閉症スペクトラム傾向が高い大学生がいかなる対処を行うのか、その対処の在り方が学生生活での困難を乗り越え、心理的ストレス反応の予防や改善ならびに健康促進をはかるうえで、大きな影響を及ぼすものと考えられる。大学生を対象とした過去の研究では、顕在化したストレスへの事後的なコーピング (Lazarus & Folkman, 1984) によってストレスを低減・緩衝を図ることに焦点を当てる視点から検討がなされてきた (加藤, 2006; 和田, 1998)。しかし、Kamio, Inada & Koyama. (2013) は、自閉症スペクトラムをもつ者には、長期的な視点での支援が必要であると指摘している。加えて、大学生のAQ-J得点は、ネガティブライフイベント経験数との間に有意な正の関連があると報告されている (田中ら, 2012)。したがって、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生には、出現したストレスへの事後的な対処だけでは十分ではないと考えられる。より長期的な視点として、現時点で出現していないが今後出現する可能性のある潜在的ストレスへの予防的・能動的な対処に関する検討が必要と考える。そこで本研究では、将来出現しうる潜在的ストレスへの対処としてプロアクティブコーピングの1種である将来志向コーピング (future oriented coping) に注目した。

将来志向コーピングはプロアクティブコーピング

(Schwarzer, 1999) から派生したもので、挑戦的な目標や個人的成長を促進させるための資源の構築に関する努力とされる (Schwarzer, 1999; Schwarzer & Taubert, 2002)。Lazarus & Folkman (1984) の提唱するコーピングが、顕在化したストレスへの事後の対処であるのに対し、将来志向コーピングは、将来のストレスに対する挑戦の側面を強調する能動的コーピングと、予防的側面を強調する予防的コーピングからなる (Schwarzer et al., 2002; Sohl & Moyer, 2009)。また、将来志向コーピングは、いまだ顕在化していない潜在的なストレスへの予防的・能動的対処を提唱するプロアクティブコーピング理論 (Schwarzer, 1999) に基づくものである。

能動的コーピングは、ストレスを挑戦的で自己成長を促す機会と認知評定し、能動的に対処することで、自己成長の達成や well-being の向上をはかるものである (Greenglass, & Fiksenbaum, 2009)。他方、予防的コーピングは、「潜在的なストレスに対する予期と、その潜在的なストレスが顕在化するまでに予防的に準備する対処努力」 (Greenglass, Schwarzer, Jakubiec, Fiksenbaum, & Taubert, 1999) とされ、ストレスに対する防御要因を獲得し、ストレスが顕在化した際の影響性を最小限に抑えることを目的としている。能動的コーピングと予防的コーピングは、ともに長期的な見通しの中で、将来的に生じうるストレスに備えるための防御要因の獲得をはかる点で共通している。加えて、能動的コーピングと予防的コーピングはいずれも、楽観性・自己効力感・ポジティブ情動・well-being との間で正の関連 (Greenglass et al., 2009; 川島, 2010; Sohl et al., 2009) が、心理的ストレス反応との間で負の関連 (Gan, Hu, & Zhan, 2010; 川島, 2010; 宇佐美, 2012) が報告されている。

市川 (2014) は、大学生を対象に AQ-J を用いて自閉症スペクトラム傾向を測定し、将来志向コーピングとの関連を調査した。その結果、AQ-J の下位尺度である「細部への注意」得点は将来志向コーピングの「能動的コーピング」ならびに「予防的コーピング」得点と正の相関関係にあり、正の影響を及ぼしていた。しかし、AQ-J の下位尺度における「社会的スキル」得点、「コミュニケーション」得点、「注意切り替え」得点ならびに「想像力」得点は、「注意切り替え」得点を除いてすべて将来志向コーピングにおける「能動的コーピング」得点ならびに「予防的コーピング」得点との間で負の相関関係にあり、負の影響を及ぼしていた。これらの結果から、大学生のもつ自閉症スペクトラム傾向は将来志向コーピングを抑制する可能性が明らかとなった。

市川 (2014) の結果から、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生は、将来志向コーピング実行能力が低いことが想定される。学生生活で苦戦を強いられている自閉症スペクトラムの大学生が今後適応していくためには、学生生活で遭遇するストレスに対して十分な対処を行う必要があると考えられる。そのためにも、将来志向コー

ピングの促進方法ならびに促進に影響を与える要因の検討が求められよう。将来志向コーピングに関する過去の研究では、将来志向コーピングが精神的健康や、心理的ストレス反応に及ぼす影響について検討されてきた (Greenglass et al., 2009; 川島, 2010; Sohl et al., 2009; Gan, Hu, & Zhan, 2010; 川島, 2010; 宇佐美, 2012)。その一方で、将来志向コーピングの実行促進に対していかなる要因が影響を与えているのかに関する検討は不十分である。

将来志向コーピングの促進、または将来志向コーピングを媒介し、精神的健康に影響を及ぼす要因として対処資源の存在が指摘されており (Greenglass, 2002)、コーピングの採択・実行を規定する重要な要因とされる (宇佐美, 2012)。対処資源は、内的資源と外的資源の二種類に分けられ、内的資源は「自己効力感」や「楽観性」等の個人内に存在するものであり、外的資源は、「周囲からのソーシャルサポート」等の個人外に存在するものである。しかし、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の対処資源と将来志向コーピングとの間の関連について調査した研究はほとんどみられない。川島 (2010) は、対処資源と将来志向コーピングとの関連は十分に明らかにされておらず、今後検討する必要があると指摘している。自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の対処資源と将来志向コーピングとの間の関連があきらかにできれば、そのような大学生の将来志向コーピングの促進を目的とした支援方法についての示唆が得られると考える。では、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の将来志向コーピングに対する対処資源とはいかなるものなのか。本研究では、内的資源に自動思考、外的資源にソーシャルサポートを取り上げる。

自動思考は、個人内で自動的に沸き起こる思考およびイメージを指し、状況に影響を受けにくい性格的要因と関連する。そして、抑うつと強い相関関係にある、抑うつ特有の認知的変数である (児玉・片柳・嶋田・坂野, 1994)。自動思考は肯定的、ならびに否定的なものの二次元でとらえられる。肯定的な自動思考は、やる気に満ちた快適な思考を指し (坂本・田中・丹野・大野, 2004)、ストレスへのコントロール感や、ストレスに積極的に働きかけるポジティブなコーピングを促進する効果 (小室, 2012) が報告されている。さらに、well-being の促進に寄与する重要な要因であることが指摘されている (岩野・樋町・坂野, 2012)。よって、高い肯定的自動思考は、自閉症スペクトラムの大学生の将来志向コーピングに対して内的資源としての機能を果たす可能性がある。

一方、否定的な自動思考は自分自身を非難したり、将来の物事を悲観的に考えたりする思考であり、肯定的自動思考への直接的な強い負の影響が指摘されている (義田・中村, 2007)。加えて、否定的自動思考は、自己成長に向けた積極的な行動との負の相関が指摘されている (徳吉・岩崎, 2014)。そして、ストレスに積極的に働きかけるポジティブなコーピングとの間で負の相関が

あり、well-beingの抑制に寄与する重要な要因と指摘されている(岩野・樋町・坂野, 2012)。従って、否定的自動思考は自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の将来志向コーピングに対する抑制要因として機能する可能性がある。否定的自動思考が将来志向コーピングを抑制するという視点は、本研究における将来志向コーピングを促進するというポジティブな視点とは少し異なる。本研究では、将来志向コーピング促進に関するさらなる示唆が得られると考えたため、将来志向コーピングを抑制するネガティブな要因も検討に加える。

ソーシャルサポートは外的な対処資源として、将来志向コーピングと密接な関連があると指摘されている(Greenglass et al., 2002)。さらに、ソーシャルサポートは、自閉症スペクトラムをもつ青年(大学生を含む)・成人に関する研究で、高い生活の質(Quality of Life : QoL)を予測する重要な要因であると指摘されている(Kamio et al., 2013)。加えて、ソーシャルサポートは、ストレスへの諦めや回避等のネガティブなコーピングを抑制し、ストレスへ積極的に働きかけるポジティブなコーピングを促進する(三浦・嶋田・坂野, 1994)。よって、ソーシャルサポートは、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の将来志向コーピングに対して外的資源としての機能を果たす可能性がある。よって、本研究では、内的資源に自動思考、外的資源にソーシャルサポートを取り上げ、検討を行う。

本研究の目的は、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の大学生生活適応支援に関する知見として、そのような大学生の能動的・予防的対処行動としての将来志向コーピングに着目し、将来志向コーピングを促進・抑制する要因としての内的・外的資源が将来志向コーピングに及ぼす影響を質問紙調査で明らかにすることである。そのため、大学生の自閉症スペクトラム傾向得点を高群・低群の二群にわけ、自動思考とソーシャルサポートが将来志向コーピングに対してどのような影響を及ぼすのか、高群・低群間での比較を通して検討する。そして、これらの検討によって、高い自閉症スペクトラム傾向を持つ大学生が、学生生活で今後生じうる困難への能動的・予防的対処の促進、ならびによりよい学生生活を送るための支援の手掛かりを得るための基礎資料を提供する。

研究方法

調査手続き

調査時期は2013年7月。関東・阪神・東海地区の複数大学において授業担当教員の許可を得た上で授業中に著者が実施した。その際、調査結果は授業評価と関係がないこと、質問紙への解答は任意であることを伝え、それらに同意した対象者のみ回答した。回答に要した時間は約20分であった。

調査協力者

大学1～4年生406名に質問紙調査を実施し、回答に不備のない387名(男性164名, 女性223名)を分析対象とした(有効回答率95.3%)。平均年齢は20.38歳($SD=$

1.31)。学部別人数の内訳は、文学部139名、教育学部131名、工学部117名であった。

使用尺度

- (1) Autism-spectrum Quotient-Japanese version: AQ-J (若林ら, 2004): AQ-JはBaron-Cohen et al. (2001)の開発した尺度Autism-spectrum Quotient: AQの日本語版である。自閉症スペクトラム仮説(Wing, 1981)に基づき作成されたAQ-Jは、自閉症スペクトラムの診断基準に当てはまる青年(大学生を含む)・成人だけでなく、当てはまらない青年(大学生を含む)・成人の自閉症スペクトラム傾向も測定することができる自己記入式の質問紙である。本研究では、AQ-J計50項目を、自閉症スペクトラム傾向として4件法(1-そうではない、2-どちらかというところ、3-どちらかというところ、4-そうである)で回答を求めた。得点の算出方法は、逆転項目に対して逆転処理を行い、各項目において自閉症スペクトラム傾向を示す側に「あてはまる」または「どちらかというところあてはまる」の回答が得られた場合に1点を与えて得点化した。
- (2) Proactive Coping Inventory Japanese version: PCI-J (Takeuchi & Greenglass, 2004): 青年・成人のプロアクティブコーピングを測定する尺度、PCIの日本語版である。PCI-Jは、Takeuchi et al. (2004)によって邦訳され、さらに、川島(2010)により大学生を対象に信頼性・妥当性が確認されている。Gan et al. (2010)に沿い、将来志向コーピングの測定には、PCI-Jの下位尺度における「能動的コーピング」下位尺度14項目、「予防的コーピング」下位尺度10項目、の計24項目を将来志向コーピングとして4件法(1-全くあてはまらない、2-ほとんどあてはまらない、3-いくらかあてはまる、4-全くその通り)で回答を求め、回答した番号を点数として得点化した。
- (3) Automatic Thoughts Questionnaire-Revised: ATQ-Rの日本語版(児玉ら, 1994): ATQ-Rは、自動思考を肯定と否定の二次元で測定する尺度で、Kendall, Howard, & Hays (1989)を、児玉ら(1994)が邦訳し、信頼性と妥当性を確認したものである。ATQ-Rは「将来に対する否定的評価」「自己に対する非難」「肯定的自動思考」の3下位尺度から構成されている。本研究では、ATQ-Rにおける「将来に対する否定的評価」下位尺度14項目、「自己に対する非難」下位尺度14項目ならびに「肯定的自動思考」下位尺度10項目の計38項目を否定的・肯定的自動思考として4件法(0-全くない、1-ときどきある、2-よくある、4-常にある)で回答を求め、回答した番号を点数として得点化した。
- (4) 学生用ソーシャル・サポート尺度: The Scale of Expectancy for Social Support: SESS (久田・千田・箕口, 1989): SESSは、大学生が周囲から受ける援助の期待感である「知覚されたソーシャルサポート」を、ソーシャルサポート源別に測定する尺度である。ソー

シャルサポートに関する先行研究では、ストレス症状の緩和・低減効果の大きさから主に知覚されたソーシャルサポート（以下、知覚ソーシャルサポート）が測定されてきた。「知覚ソーシャルサポート」とは「困っているときに友達や家族が助けてくれる」等の援助を受ける期待感を示すものである。自閉症スペクトラムは、ソーシャルサポートを認知しづらいとされる（Kelly, Garnett, Attwood, & Peterson, 2008）。よって、ソーシャルサポートを測定する上で、ソーシャルサポートを受ける可能性への主観的評価である「知覚ソーシャルサポート」を測定することが適していると判断した。さらに、嶋（1992）は、大学生のソーシャルサポートネットワークにおいて家族と友人が重要な位置を占めることを指摘している。従って、「家族」と「友人・知人」を大学生のソーシャルサポート源として設定する。そして、「知覚ソーシャルサポート」に関する16項目をソーシャルサポート源別に4件法（1－絶対に違う、2－たぶんちがう、3－たぶんそうだ、4－きっとそうだ）で回答を求め、回答した番号を点数として得点化した。

統計処理に使用するソフト

本研究の統計処理にはSPSS 21とHAD（清水・村山・大坊, 2006）を用いた。

分析の手続き

使用する尺度の記述統計量ならびに、尺度間の相関係数を算出する。そして、AQ-J得点を群分け変数、ATQ-R得点ならびにSESS得点を説明変数、将来志向コーピング得点を目的変数とする階層的重回帰分析を行う。

結果

AQ-J、ATQ-R、SESS、将来志向コーピングの各下位尺度の記述統計量と相関分析結果

対象者のAQ-J、ATQ-R、SESSと将来志向コーピングの各下位尺度の α 係数・平均値・標準偏差ならびに尺度間におけるpearsonの相関係数を相関分析（両側検定）で算出し、Table 1に示した。各尺度の内的整合性はChronbachの α 係数で求めた。その結果各尺度はいずれも十分な信頼性が認められた（ $\alpha = .82 \sim .95$ ）。

尺度間相関については、AQ-JとATQ-Rの「将来に対する否定的評価」との間、ならびに「自己に対する非難」との間で有意な中程度の正の相関係数（順に、 $r = .393, p < .001$ ； $r = .397, p < .001$ ）、そしてAQ-JとATQ-Rの「肯定的自動思考」との間で有意な中程度の負の相関係数（ $r = -.424, p < .001$ ）、さらにAQ-JとSESSの「友人・知人からのソーシャルサポート」との間、ならびに「家族からのソーシャルサポート」との間で有意な弱から中程度の負の相関係数が示された（順に、 $r = -.313, p < .001$ ； $r = -.434, p < .001$ ）。将来志向コーピングの「能動的コーピング」は、AQ-Jとの間で有意な中程度の負の相関係数（ $r = -.437, p < .001$ ）、そして「能動的コーピング」とATQ-Rの「将来に対する否定的評価」との間、ならびにATQ-Rの「自己に対する非難」との

間で有意な弱から中程度の負の相関係数を示した（順に $r = -.306, p < .001$ ； $r = -.291, p < .001$ ）。また、「能動的コーピング」とATQ-Rの「肯定的自動思考」との間、SESSの「友人・知人からのソーシャルサポート」との間、「家族からのソーシャルサポート」との間で有意な弱から中程度の正の相関係数がみられた（順に $r = .536, p < .001$ ； $r = .319, p < .001$ ； $r = .380, p < .001$ ）。

将来志向コーピングの「予防的コーピング」は、AQ-Jとの間、ATQ-Rの「将来に対する否定的評価」との間、「自己に対する非難」との間で有意な弱い負の相関係数が得られた（順に、 $r = -.177, p < .001$ ； $r = -.109, p < .05$ ； $r = -.089, p < .10$ ）。さらに、「予防的コーピング」は、ATQ-Rの「肯定的自動思考」との間、SESSの「友人・知人からのソーシャルサポート」との間、「家族からのソーシャルサポート」との間で有意な弱い正の相関係数がみられた（順に、 $r = .264, p < .001$ ； $r = .243, p < .001$ ； $r = .228, p < .001$ ）。将来志向コーピングの「能動的コーピング」は、「予防的コーピング」との間で有意な中程度の正の相関係数が示された（ $r = .522, p < .001$ ）。

AQ-J 高群・低群別、ATQ-R ならびに SESS の各下位尺度を説明変数、将来志向コーピングを目的変数とした階層的重回帰分析結果

階層的重回帰分析の手続き

自閉症スペクトラム傾向が高い大学生と低い大学生の内的資源としての自動思考ならびに外的資源としての知覚ソーシャルサポートが将来志向コーピングに及ぼす影響をみるため5ステップからなる階層的重回帰分析を行った。まず、階層的重回帰分析を行う前に、用いる説明変数間で多重共線性が発生する可能性を考慮した。Table 1で示した相関分析の結果では、ATQ-Rの「将来に対する否定的評価」得点と「自己に対する非難」得点との間、SESSの「友人・知人からのソーシャルサポート」得点と「家族からのソーシャルサポート」得点との間で強い相関係数が示されていた（順に、 $r = .958, p < .001$ ； $r = .715, p < .001$ ）。そのため、階層的重回帰分析で説明変数として用いる前に、ATQ-Rの「将来に対する否定的評価」得点と「自己に対する非難」得点、ならびにSESSの「家族からのソーシャルサポート」得点と「友人・知人からのソーシャルサポート」得点を主成分分析で合成し、合成得点を算出した。

ATQ-Rの「将来に対する否定的評価」得点と「自己に対する非難」得点の主成分分析の結果、1つの主成分が抽出された。抽出された第一主成分の累積寄与率は97.90%であり、「否定的自動思考」と名付けた。また、SESSの「家族からのソーシャルサポート」得点と「友人・知人からのソーシャルサポート」得点の主成分分析の結果、1つの主成分が抽出された。第一主成分の累積寄与率は85.77%であり、「ソーシャルサポート」と名付けた。これらの合成得点を説明変数として階層的重回帰分析で用いた。

階層的重回帰分析のステップについて述べる。まず、

AQ-J 得点を群分け変数として平均値±1SD を基準に AQ-J 高群・低群を設定した。そして、将来志向コーピングの各下位尺度を目的変数として設定し、目的変数別に、説明変数として AQ-J 得点、ATQ-R の「否定的自動思考」得点と「肯定的自動思考」得点、ならびに SESS の「ソーシャルサポート」得点を、ステップ1で AQ-J 得点、ステップ2で「否定的自動思考」得点、ステップ3で「肯定的自動思考」得点、ステップ4で「ソーシャルサポート」得点をそれぞれ主効果項として順に回帰式に投入した。さらに、ステップ5では AQ-J 得点と「否定的自動思考」得点、AQ-J 得点と「肯定的自動思考」得点、AQ-J 得点と「ソーシャルサポート」得点の交互作用項を同時に回帰式に投入した。また、主効果項と交互作用項との間に多重共線性が生じるのを避けるため、説明変数は全て分析の前に標準化を行った。そして、最終的な分析結果を Table 2 に示す。加えて、有意な交互作用が認められた変数間については、説明変数の各平均値±1SD の値を設定し、目的変数に対しての単回帰直線を求めた。

将来志向コーピングにおける能動的コーピングを目的変数とした階層的重回帰分析結果

AQ-J 高群・低群ともに、将来志向コーピングの「能動的コーピング」への AQ-J の主効果 (AQ-J 高群・低群いずれも $\beta = -.222, p < .001$) ならびに、将来志向コー

ピングの「能動的コーピング」への ATQ-R の「肯定的自動思考」の主効果が、有意であった (AQ-J 低群、 $\beta = .430, p < .001$; AQ-J 高群、 $\beta = .385, p < .001$)。しかし、将来志向コーピングの「能動的コーピング」への SESS の「ソーシャルサポート」の主効果は AQ-J 低群では有意ではなく、AQ-J 高群のみ有意であった (AQ-J 低群、 $\beta = .009, ns$; AQ-J 高群、 $\beta = .235, p < .001$)。加えて、将来志向コーピングの「能動的コーピング」への AQ-J とソーシャルサポートの交互作用項は有意な効果がえられた (AQ-J 低群、 $\beta = .188, p < .05$; AQ-J 高群、 $\beta = .148, p < .05$)。交互作用の効果を Figure 1 と Table 3 に示した。そして、全てのステップにおいて決定係数の有意な増加が認められた (ステップ1、 $\Delta R^2 = .191, p < .001$; ステップ2、 $\Delta R^2 = .019, p < .01$; ステップ3、 $\Delta R^2 = .132, p < .001$; ステップ4、 $\Delta R^2 = .017, p < .01$; ステップ5、 $\Delta R^2 = .012, p < .10$)。また、AQ-J 高・低群ともに将来志向コーピングの「能動的コーピング」への ATQ-R の「否定的自動思考」の主効果は有意ではなかった (AQ-J 低群、 $\beta = .018, ns$; AQ-J 高群、 $\beta = .073, ns$)。

将来志向コーピングにおける予防的コーピングを目的変数とした階層的重回帰分析結果

AQ-J 高・低群ともに将来志向コーピングにおける「予防的コーピング」への ATQ-R の「肯定的自動思考」の有意な主効果が認められた (AQ-J 低群、 $\beta = .259, p <$

Table 1 AQ-J、ATQ-R、SESS、将来志向コーピングの各尺度の記述統計量および各尺度間の相関分析結果 (pearson・両側検定、N=387)

尺度	a係数	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1 AQ-J	.82	20.58	6.60	—							
2 ATQ-R 将来に対する否定的評価	.93	26.55	8.66	.393***	—						
3 自己に対する非難	.92	26.26	7.97	.397***	.958***	—					
4 肯定的自動思考	.90	23.99	5.95	-.424***	-.520***	-.508***	—				
5 SESS 友人・知人からのソーシャルサポート	.95	51.53	8.56	-.313***	-.287***	-.284***	.312***	—			
6 家族からのソーシャルサポート	.95	51.98	9.67	-.434***	-.368***	-.366***	.395***	.715***	—		
7 将来志向 能動的コーピング	.84	37.37	6.08	-.437***	-.306***	-.291***	.536***	.319***	.380***	—	
8 コーピング 予防的コーピング	.83	25.70	5.01	-.177***	-.109*	-.089†	.264***	.243***	.228***	.522***	—

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 2 AQ-J 高群・低群別に内的・外的資源を説明変数、将来志向コーピングを目的変数とした階層的重回帰分析結果 (N=387)

目的変数	ステップ	説明変数	AQ-J低群		AQ-J高群		ΔR^2	ΔF 値	累積 R^2
			β	t値	β	t値			
能動的コーピング	1 主効果	AQ-J	-.222	-4.638***	-.222	-4.638***	.191	91.016***	.191
	2 主効果	否定的自動思考	.018	0.219	.073	1.271	.019	9.313**	.210
	3 主効果	肯定的自動思考	.430	6.295***	.385	5.278***	.132	76.578***	.342
	4 主効果	ソーシャルサポート	.009	0.131	.235	4.051***	.017	10.155**	.359
	5 交互作用	否定的自動思考×AQ-J	.046	0.602	.036	0.602			
		肯定的自動思考×AQ-J	-.032	-0.469	-.035	-0.469			
		ソーシャルサポート×AQ-J	.188	2.577*	.148	2.577*	.012	2.309†	.370
予防的コーピング	1 主効果	AQ-J	-.043	-0.768	-.043	-0.768	.031	12.406***	.031
	2 主効果	否定的自動思考	.126	1.326	.092	1.359	.001	0.413	.032
	3 主効果	肯定的自動思考	.259	3.210***	.207	2.404*	.047	19.370***	.079
	4 主効果	ソーシャルサポート	.021	0.252	.283	4.127***	.026	11.191**	.105
	5 交互作用	否定的自動思考×AQ-J	-.028	-0.310	-.022	-0.310			
		肯定的自動思考×AQ-J	-.036	-0.456	-.041	-0.456			
		ソーシャルサポート×AQ-J	.218	2.529*	.171	2.529*	.019	2.670*	.124

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

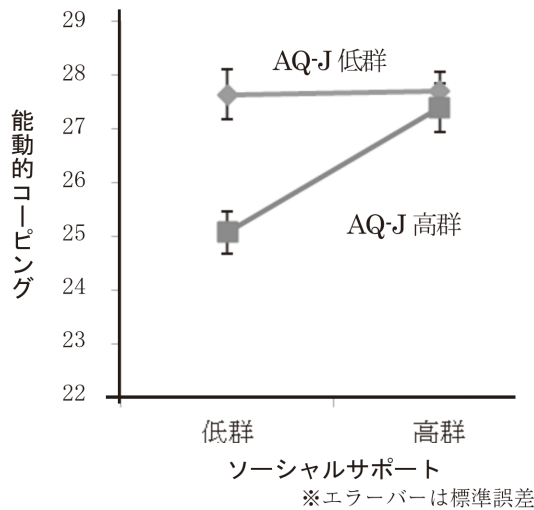


Figure 1 「能動的コーピング」に対する AQ-J 高・低群別、「ソーシャルサポート」の交互作用

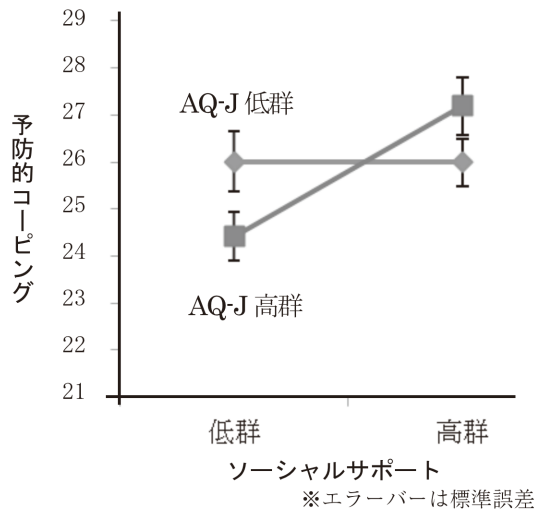


Figure 2 「予防的コーピング」に対する AQ-J 高・低群別、「ソーシャルサポート」の交互作用

.001; AQ-J 高群、 $\beta=.207, p<.05$ 。そして、将来志向コーピングの「予防的コーピング」への SESS の「ソーシャルサポート」の主効果は AQ-J 低群では有意ではなく、AQ-J 高群のみ有意であった (AQ-J 低群、 $\beta=.021, ns$; AQ-J 高群、 $\beta=.283, p<.001$)。加えて、将来志向コーピングの「予防的コーピング」への AQ-J とソーシャルサポートの交互作用項は有意な効果がえられた (AQ-J 低群、 $\beta=.218, p<.05$; AQ-J 高群、 $\beta=.171, p<.05$)。交互作用の効果を Figure 2 と Table 4 に示した。そして、1、3、4、5 ステップにおいて決定係数の有意な増加が認められた (ステップ 1、 $\Delta R^2=.031, p<.001$; ステップ 3、 $\Delta R^2=.047, p<.001$; ステップ 4、 $\Delta R^2=.026, p<.01$; ステップ 5、 $\Delta R^2=.019, p<.05$)。また、AQ-J 高・低群ともに将来志向コーピングの「予防的コーピング」への AQ-J の主効果 (AQ-J 高・低群ともに、 $\beta=-.043, ns$)、ならびに ATQ-R の「否定的自動思考」の主効果は有意な結果ではなかった (AQ-J 低群、 $\beta=.126, ns$; AQ-J 高群、 $\beta=.092, ns$)。なお、多重共線性を考慮するため、全ての目的変数に対する説明変数の分散インフレ係

Table 3 「能動的コーピング」に対する AQ-J 高・低群別、「ソーシャルサポート」の交互作用

		ソーシャルサポート		
		低群	高群	
AQ-J	低群	2.76	2.77	
	高群	2.51	2.74	**

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 4 「予防的コーピング」に対する AQ-J 高・低群別、「ソーシャルサポート」の交互作用

		ソーシャルサポート		
		低群	高群	
AQ-J	低群	2.60	2.60	
	高群	2.44	2.72	**

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

数 (variance inflation factor : VIF) を算出した。その結果、VIF はいずれも 2 以下の値であり、多重共線性の可能性は除外された。

考察

本研究の目的は、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の、対処資源としての自動思考と知覚ソーシャルサポートが将来志向コーピングに及ぼす影響を明らかにするため、大学生の自閉症スペクトラム傾向の高低で比較・検討することであった。本研究における相関分析と階層的重回帰分析の結果、AQ-J と「能動的コーピング」との間、ならびに「予防的コーピング」との間には有意な負の関連がみられた。これは市川 (2014) の結果と共通するものである。したがって、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生は将来志向コーピングの実行能力が低い可能性が高い。階層的重回帰分析の結果から、AQ-J 高群・低群ともに、肯定的自動思考が将来志向コーピングの能動的コーピングならびに予防的コーピングに正の影響を及ぼすことが明らかとなった。加えて、AQ-J 低群では、知覚ソーシャルサポートから将来志向コーピングの能動的コーピングならびに予防的コーピングに対していずれも有意な影響は見いだされなかった。他方 AQ-J 高群では、知覚ソーシャルサポートから将来志向コーピングの能動的コーピングならびに予防的コーピングともに正の影響を及ぼしていた。したがって、自閉症スペクトラム傾向が高いほど、知覚ソーシャルサポートから将来志向コーピングの能動的コーピングならびに予防的コーピングに及ぼす正の影響が強くなることが示された。階層的重回帰分析の結果から、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の将来志向コーピング促進には、肯定的自動思考の改善、家族ならびに友人・知人から知覚しやすいソーシャルサポートが、より多く行われる必要があるといえる。この結果は、自閉症スペクトラムをもつ青年 (大学生を含む)・成人への家族からならびに友人・知人からの知覚ソーシャルサポートは QOL や well-being 等のポジティブ要因の促進に関して重要な働きをするという、Kamio et al., (2013) の結果を裏付けるものであるといえよう。さらに、AQ-J と知覚ソーシャルサポートとの

交互作用項は、能動的コーピングならびに予防的コーピングに対していずれも有意な効果を示した。よって、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の将来志向コーピングを促進するには、自閉症スペクトラム傾向が低い大学生とは異なる要因に着目する必要があることが明らかになった。

自閉症スペクトラム傾向高群と低群との間で、知覚ソーシャルサポートが将来志向コーピングに及ぼす効果に違いがみられた。この結果について知覚ソーシャルサポートの緩衝効果の視点から考察する。嶋 (1992) は、知覚ソーシャルサポートの緩衝効果において、低ストレス状態にある人は、知覚ソーシャルサポート量の高さと健康状態との間に関連はないが、高ストレス状態にある人では、知覚ソーシャルサポート量が高いほど健康状態が良好であるとしている。金井 (2010) は、AQ-J 得点が高い大学生は、AQ-J 得点が高い大学生よりも抑うつ得点が高いと指摘している。さらに本研究での相関分析の結果、AQ-J 得点と ATQ-R における「将来に対する否定的評価」得点、ならびに「自己に対する非難」得点との間で有意な正の相関関係がみられた。これらの結果から自閉症スペクトラム傾向が高い大学生は低い大学生よりも高ストレス状態にあると想定された。したがって、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生においては、将来志向コーピングに対して知覚ソーシャルサポートの緩衝効果が働いたと考えられる。

将来志向コーピングを促進するというポジティブな視点だけでなく、将来志向コーピングを抑制するというネガティブな視点も加えて検討を行った。そのため、内的資源としての否定的自動思考は、将来志向コーピングの抑制要因として機能する可能性を想定していた。しかし、AQ-J 高群・低群ともに、否定的自動思考から将来志向コーピングの「能動的コーピング」ならびに「予防的コーピング」のいずれに対しても有意な影響はみいだされなかった。よって、否定的自動思考は、将来志向コーピングの抑制要因としては機能しない可能性が示唆された。

本研究結果から、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生における将来志向コーピングの実行を促進するための介入方法には、肯定的自動思考の改善ならびに知覚ソーシャルサポートの向上を考慮に入れる必要があるといえる。将来志向コーピングの促進を目的とした介入に関する研究として、Bode, de Ridder, Kuijer, & Bensing (2007) がある。Bode et al. (2007) は、50歳から75歳の間の男女158名に対してプロアクティブコーピング理論に基づき作成した短期教育プログラムを4セッション行った。その結果、実験群では、プログラムの実施前と実施後との間でプロアクティブコーピング得点の有意な上昇がみられた。また、実験群において上昇したプロアクティブコーピング得点は、プログラム終了の三か月後時点で維持されていた。今後、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の将来志向コーピングの促進を目的とする介入のためには、肯定的児童思考の改善ならびに知覚ソーシャルサポートの向上を考慮に入れたプログラムを作成

したうえで、作成したプログラムの効果を実験的に検討する必要があるだろう。

本研究は、大学生のもつ自閉症スペクトラム傾向得点を AQ-J を用いて測定し、その得点の高低群を対象としたアナログ研究である。そのため、本研究結果が自閉症スペクトラムと診断がなされている大学生に対しても当てはまるかどうかについて今後検討が必要である。自閉症スペクトラム傾向が高い大学生の日常生活における一般的な自動思考、知覚ソーシャルサポートと将来志向コーピングの関連について検討した。しかし、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生が高頻度で遭遇すると想定される対人ストレス場面等、特定のストレス場面に対する将来志向コーピングや対処資源の活用についても検討する必要があるだろう。加えて、変数間の因果関係についてより詳細に明らかにするためにも横断的な検討だけでなく、縦断的な検討を行う必要がある。

また、自閉症スペクトラム傾向が高い大学生のソーシャルサポートを測定する上で、実際に受けたソーシャルサポートである「実行されたソーシャルサポート」ではなく、ソーシャルサポートが実行される期待感を示す「知覚されたソーシャルサポート」を測定した。よって、本研究における大学生の知覚されたソーシャルサポート量と、実際に提供されているソーシャルサポート量との間に差異があるかもしれない。

さらに、大学生の自閉症スペクトラム傾向として AQ-J の総得点を使用し検討したが、AQ-J の下位尺度得点を検討に加えなかった。市川 (2014) は、AQ-J の下位尺度別に将来志向コーピングとの間の関連について調査していたことから、今後自閉症スペクトラム傾向が高い大学生のもつ特性と将来志向コーピングならびに対処資源との間の関連について調査する必要があると考える。

引用文献

- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J. & Clubley, E. (2001). The Autism-Spectrum Quotient (AQ): Evidence from Asperger syndrome/ high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 5-17.
- Bode, C., Ridder, D. T. D., Kuijer, R. G., & Bensing, J. M. (2007). Effects of an Intervention Promoting Proactive Coping Competencies in Middle and Late Adulthood. *The Gerontologist*, 47(1), 42-51.
- Gan, Y., Hu, Y. & Zhang, Y. (2010): Proactive and Preventive Coping in Adjustment to College. *The Psychological Record*, 60, 643-658.
- Greenglass, E.R., Schwarzer, R., Jakubiec, D., Fiksenbaum, L., & Taubert, S., (1999). The Proactive Coping Inventory (PCI): A Multidimensional Research Instrument. *20th International Conference of the Stress and Anxiety Research Society (STAR)*, Cracow, Poland, July 12-14. (<http://userpage.fu-berlin.de/~health/greenpci.htm>).

- Greenglass, E.R. (2002). Proactive coping. In E. Frydenberg (Ed.), *Beyond coping: Meeting goals, vision, and challenges*. London: Oxford University Press, 37-62.
- Greenglass, E.R. & Fiksenbaum, L. (2009). Proactive Coping, Positive Affect, and Well-Being Testing for Mediation Using Path Analysis. *European Psychologist*, 14(1), 29-39.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 (1989). 学生用ソーシャルサポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 市川 哲 (2014). 大学生の自閉症スペクトラム傾向とプロアクティブコーピングとの関連. *学校カウンセリング研究*, 14, 17-26.
- 岩野 卓・樋町美華・坂野雄二 (2012). 就労者の心理的ウェルビーイング促進要因 健康心理学研究, 25(1), 52-63.
- Kamio, Y., Inada, N. & Koyama, T. (2013). A nationwide survey on quality of life and associated factors of adults with high-functioning autism spectrum disorders. *Autism*, 17(1), 15-26.
- 金井嘉宏 (2010). 自閉症スペクトラム傾向を示す大学生の抑うつにソーシャル・サポートと被害念慮が及ぼす影響 *カウンセリング研究*, 43, 113-119.
- 加藤 司 (2006). 対人ストレス過程における友人関係目標. *教育心理学研究*, 54(3), 312-321.
- 川島一晃 (2007). 成長へ結びつけるコーピング研究の理論的検討—新しいコーピング理論としての proactive coping theory— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 54, 93-191.
- 川島一晃 (2010). 困難状況を個人の成長に結びつける対処に関する基礎的研究 proactive coping inventory 日本語版 PCI-J における信頼性・妥当性の検討 *心理臨床学研究*, 28(2), 184-195.
- Kendall, P. C., Howard, B. L., & Hays, R.C. (1989). Self referent speech and psychopathology: The balance of positive negative thinking. *Cognitive Therapy and Research*, 12, 533-547.
- 児玉昌久・片柳弘司・嶋田洋徳・坂野雄二 (1994). 大学生におけるストレスコーピングと自動思考、状態不安、および抑うつ症状との関連 *ヒューマンサイエンス*, 7(1), 14-26.
- 小室憲吾 (2012). 大学生における肯定的自動思考についての実証的研究—ストレス場面の認知的評価およびコーピングスタイルの観点から— 奈良大学大学院研究年報, 17, 183-188.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *stress, appraisal, and coping*. New York: Springer. (本明寛・春木豊・織田正美 (訳) (1991). *ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究*. 実務教育出版)
- 三浦正江・嶋田洋徳・坂野雄二 (1995). 中学生におけるソーシャルサポートがコーピングの実行に及ぼす影響. *ストレス科学研究*, 10(1), 13-24.
- 日本学生支援機構 (2015). 平成26年度 (2014年度) 大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書. (http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/2014houkoku.pdf)
- 坂本真士・田中江里子・丹野義彦・大野 裕 (2004). Beck の抑うつモデルの検討 *日本大学心理学研究*, 25, 14-23.
- 須田奈都美・高橋知音・上村恵津子・森光晃子 (2011). 大学における発達障害学生支援の現状と課題 *心理臨床学研究*, 29(5), 651-660.
- Schwarzer, R. (1999). Proactive coping Theory. Paper presented at the 20th International Conference of Stress and Anxiety Research Society (STARS), Cracow, July 12-14, Poland.
- Schwarzer, R. & Taubert, S. (2002). Tenacious goal pursuits and striving toward personal growth: Proactive coping. In E. Frydenberg (Ed.), *Beyond coping: Meeting goals, visions and challenges*. Oxford University Press, 19-35.
- 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 *社会心理学研究*, 7(1), 45-53.
- 清水裕士・村山綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 *電子情報通信学会技術研究報告*, 106(146), 1-6.
- Sohl, S.J. & Moyer, A. (2009). Refining the Conceptualization of an Important Future-Oriented Self-Regulatory Behavior: Proactive Coping. *Personality and Individual Differences*, 47(2), 139-144.
- Takeuchi, N., & Greenglass, E. (2004). 能動的コーピングに関する質問紙表 The Proactive Coping Inventory: 日本語版. (<http://www.psych.yorku.ca/greenglass/pdf/japanesepci.pdf>).
- 田中 翔・中村菜々子 (2014). 大学生の対人ストレス場面における認知的評価と対処行動—自閉症スペクトラム指数とサポートサイズの違いによる検討— *発達心理臨床研究*, 20, 20-29.
- 田中純夫・西田敬志・木村翔 (2012). 大学生における自閉症スペクトラムとライフイベント経験との関連 *日本教育心理学会総会発表論文集*, 54, p630.
- 徳吉陽河・岩崎祥一 (2014). 自己成長主導性尺度 II (PGIS-II) 日本語版の開発と心理的測定 *心理学研究*, 85(2), 178-187.
- 宇佐美尋子 (2012). proactive coping が心理的健康状態に及ぼす影響についての検討 *聖徳大学研究紀要*, 45, 9-14.
- 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S. (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討— *心理学研究*, 75(1), 78-84.

- 和田 実 (1998). 大学生のストレスへの対処、および
ストレス、ソーシャルサポートと精神的健康の関係—
性差の検討— 実験社会心理学研究, 38, 193-201.
- Wing, L. (1981). Asperger syndrome: a clinical account.
Psychological Medicine, 11, 115-130.
- 山本奈都実・高橋知音 (2009). 自閉症傾向のある大学
生の支援ニーズ把握の質問紙の開発 日本教育心理学
会総会発表論文集, 51, 298.
- 義田俊之・中村知靖 (2007). 抑うつへの促進および低減
プロセスにおける自動思考の媒介効果 教育心理学研
究, 55, 313-324.

謝辞

本論文は、第一著者が兵庫教育大学大学院に提出した
修士論文を再分析・再構成したものである。本論文を作
成するに当たり、金子一史先生（名古屋大学）、宇田光
先生（南山大学）、川島一晃先生（皇學館大学）、山本真
也先生（兵庫教育大学）から貴重なご助言をいただいた。
この場をお借りして感謝申し上げます。また、調査に協
力していただいた大学生の方々にもこの場をお借りして
感謝申し上げます。